

氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅵ

1998年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

1999年3月

氷見市埋蔵文化財分布調査報告VI

1998年度

氷見市教育委員会
富山大学考古学研究室

1999年3月

序

富山湾に面し海の幸、山の幸に恵まれた氷見市は、古くより人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育み、守ってきました。

特に、大正7年に調査された大境洞窟は、日本で最初の洞窟遺跡調査として、同じく朝日貝塚は日本海側有数の貝塚として、学史にその名を留め、国指定史跡になっております。

しかしながら、近年、生活の豊かさ、利便さを求めて開発が進められる一方で、これらの貴重な文化遺産の保護のための営みも重視されているのであります。

市教育委員会といたしましては、文化遺産保護のため、市内全域の詳細分布調査を実施することにより、より充実した遺跡地図を作成することにいたしました。

文化財の保護を通して先人の文化を理解・伝承することは、真の地域社会の発展につながるものであると考えます。

この報告書がより多くの方々に利用され、文化財保護の一助となることを願っております。

終わりに、調査の実施及び報告書の作成にあたり、ご協力いただきました地元の方々、またご援助いただきました富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に、厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

氷見市教育委員会

教育長 江 幡 武

例　　言

- 1 本書は、富山県氷見市教育委員会が国庫補助事業として実施している遺跡詳細分布調査の第6年度(1998年度)の報告書である。
- 2 調査にあたっては、富山県埋蔵文化財センターおよび富山大学考古学研究室の指導と協力を得て、後記の調査団を編成してこれを実施した。
- 3 遺物整理・実測・製図・写真撮影は、氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究と富山大学考古学研究室の全員が協力して行った。
- 4 本文は、宇野隆夫・前川要(富山大学人文学部)、大野究(氷見市教育委員会)、大塚純司・田中學(富山大学大学院人文学研究科学生)、阿部來・井出靖夫・瓜生日奈子・表原孝好・片桐清恵・川端良招・笠井史生・塙田直哉・不嶋美穂・的場茂光・八巻謙司・山口歐志(富山大学人文学部考古学研究室学生)が分担して執筆した。執筆の分担は本文に記した。
- 5 参考文献は本文末に一括し、通し番号を付して示した。
- 6 遺物番号は図版毎に通し番号を付した。実測図と写真の番号は統一して用いた。
- 7 採集遺物・記録書類は氷見市教育委員会で保管・公開している。
- 8 編集は宇野隆夫・前川要・大野究の指導の下に、大塚純司・田中學が行った。

目 次

第1章 はじめに.....	1
1 調査の目的.....	1
2 調査の経過.....	1
3 氷見市の地勢と自然環境.....	4
4 1998年度調査区の地勢と地区割.....	4
第2章 分布調査の成果	7
1 遺跡と採集遺物.....	7
(1) 荒山城跡.....	7
(2) 尾端城跡.....	7
(3) 磯辺明円遺跡.....	7
(4) 碓部神社中世墓.....	7
(5) 磯辺中世墓.....	7
(6) 森守城跡.....	7
(7) 海老瀬城跡.....	8
(8) 指崎向山古墳群.....	8
(9) 指崎五反田遺跡.....	8
(10) 指崎諏訪野遺跡.....	8
(11) 八代城跡.....	8
(12) 阿尾島尾山砦跡.....	8
(13) 阿尾島尾A遺跡.....	9
(14) 阿尾島尾B遺跡.....	11
(15) 阿尾遺跡.....	11
(16) 阿尾城山横穴群.....	11
(17) 阿尾城跡.....	11
(18) 阿尾瀬バケ谷内遺跡.....	12
(19) 阿尾瀬バケ谷内横穴群.....	12
(20) 山崎城跡.....	12
(21) 阿尾向田遺跡.....	13
(22) 指崎向山遺跡.....	13
(23) その他の採集遺物.....	13
2 遺物の散布状態.....	15
(1) 縄紋時代遺物の散布状態.....	15
(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態.....	15
(3) 古代遺物の散布状態.....	15
(4) 中世遺物の散布状態.....	15
(5) 近世遺物の散布状態.....	15
(6) 小結.....	16
第3章 おわりに.....	24
参考文献.....	26

図版目次

	関連頁
図版1 F地区航空写真	1963年撮影 1~6
図版2 F地区航空写真	1992年撮影 1~6
図版3 遺物実測図(1)	瓜生製図 7~14
図版4 遺物実測図(2)	瓜生製図 7~14
図版5 遺物実測図(3)	井出製図 7~14
図版6 遺物写真(1)	大塚・田中撮影 7~14
図版7 遺物写真(2)	大塚・田中撮影 7~14
図版8 遺物写真(3)	大塚・田中撮影 7~14
図版9 F地区的遺跡と遺物採集地点(1)	阿部作成 7
図版10 F地区的遺跡と遺物採集地点(2)	井出作成 7~14
図版11 F地区的遺跡と遺物採集地点(3)	片桐作成 7~14
図版12 F地区的遺跡と遺物採集地点(4)	瓜生作成 7~13
図版13 F地区的遺跡と遺物採集地点(5)	川端作成 7
図版14 F地区的遺跡と遺物採集地点(6)	八巻作成 8~13~14
図版15 F地区的遺跡と遺物採集地点(7)	塙田作成 8
図版16 F地区的遺跡と遺物採集地点(8)	不鶴作成 8~13
図版17 F地区的遺跡と遺物採集地点(9)	阿部作成 14
図版18 F地区の遺跡と遺物採集地点(10)	笠井作成 12
図版19 F地区的遺跡と遺物採集地点(11)	表原作成 14

挿図目次

第1図 水見市の地勢と地区割図	笠井作成 3
第2図 F地区図	塙田・八巻作成 5
第3図 F地区地区割図	片桐・川端・山口作成 6
第4図 F地区遺跡分布図	片桐・川端・山口作成 17
第5図 縄紋時代遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 18
第6図 弥生・古墳時代遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 19
第7図 古代遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 20
第8図 中世遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 21
第9図 近世遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 22
第10図 時期不明遺物の散布状態	片桐・川端・山口作成 23

第1章 はじめに

1 調査の目的

水見市が人の活動の舞台となったのは、現在知られている限りでは、今から約1万年前、上庄川上流域の丘陵においてである。以後、遺跡は丘陵から海岸まで広く分布し、現在に至るまで連続と人びとの営みが続いたものと思われる。

水見市の遺跡の数は、大正7年（1918）の大境洞窟・朝日貝塚の発見以後、昭和47年（1972）の『富山県遺跡地図』では83個所、昭和58年（1983）の『水見市遺跡地図』では143個所と、年々増加してきている。

しかし、これらの成果は系統だった分布調査によるものではなく、その範囲・時期などについて不明な点が多く、また未発見・未登録の遺跡も少なからず存在するものと予測される。

また近年の開発の増加に伴い、遺跡の保護と開発の調整が社会問題化してきており、中には人知れぬまま消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような状況下において、埋蔵文化財の保護と活用のため、また保護と開発との調整のため、基礎資料としての遺跡地図の一層の充実が望まれたのである。

2 調査の経過

このような状況のもと、水見市では平成4年度からスタートする第6次総合計画の主要施策のひとつとして、「指定文化財の再調査はもとより、指定以外の文化財、埋蔵文化財の調査・発掘及び資料の収集に努め、活力ある文化財として、郷土の歴史的遺産の保護・顕彰をはかる」ことをあげ、主要事業のひとつに「遺跡地図の作成」をあげた。

これを受けて水見市教育委員会では、平成4年度に昭和58年の『水見市遺跡地図』発行以後の新知見を加えた『水見市遺跡地図』〔第2版〕を発行し、234個所の遺跡を登録した。

さらに、平成5年度からは、この遺跡地図をさらに充実させるため、国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査を実施することになった。

調査にあたっては、水見市教育委員会を中心とし、富山大学考古学研究室の全面的な協力を得て、下記の調査団を編成した。

調査の方針としては、市域の平野部全体を調査対象とし、7個年計画とすること、年度毎に報告書を作成し、最終的には、より充実した遺跡地図を刊行することが決定された。

今年度の現地調査は、F地区について（第1図）、1998年11月1日～12月14日までの間、計14日間、延べ170人余の参加を得て、実施した。

（大野 究）

氷見市埋蔵文化財分布調査団

團長：江幡 武（氷見市教育委員会教育長）

調査員：宇野 隆大（富山大学人文学部教授）

前川 要（富山大学人文学部助教授）

鈴木 瑞應（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

大野 宛（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：田中 幸生・山崎 雅恵・大塚 純司・田中 學

（富山大学大学院人文科学研究生科学生）

中谷 正和・小野 基（富山大学人文学部研究生）

中川 曜矢・梶田重友美・小幡 鮎子・小松 博幸・後藤 晋・佐々木建二・

佐藤 慎・須田 雅昭・高志こころ・高安 洋治・滝川 邦彦・戸籠暢宏・

中島 和哉・中野 秀昭・西村 優子・早川さやか・三浦 知徳・荒木 慎也・

磯村 愛子・佐々木亮二・砂田 普司・高橋 泰生・遠野いすみ・貫井 美鈴・

廣瀬 直樹・真井田宏彰・宮川 俊輔・渡辺 树

（富山大学人文学部考古学研究室三、四年生）

調査協力者：阿部 來・井出 靖夫・瓜生日奈子・表原 孝好・片桐 清恵・川端 良招・

筒井 史生・塙田 直哉・不動 美穂・的場 茂晃・八巻 謙司・山口 欧志

（富山大学人文学部考古学研究室一年生）

飯山志のぶ・猪狩 俊哉・伊藤 直美・肩原由希子・小栗山希代・澤野 寿子・

新宅 出紀・小泉 史恵・田中 洋一・葛川 貴祥・床平 慎介・農田慎一郎・

萩原佐知子・藤原 孝夫・水岩田 篤・山下 研・山本 敏幸・遊佐真一郎

（富山大学人文学部一年生）

事務局：石崎 久男（氷見市教育委員会生涯学習課課長）

阿尾 博子（氷見市教育委員会生涯学習課課長代理）

星敷 宗一（氷見市教育委員会生涯学習課文化係長）

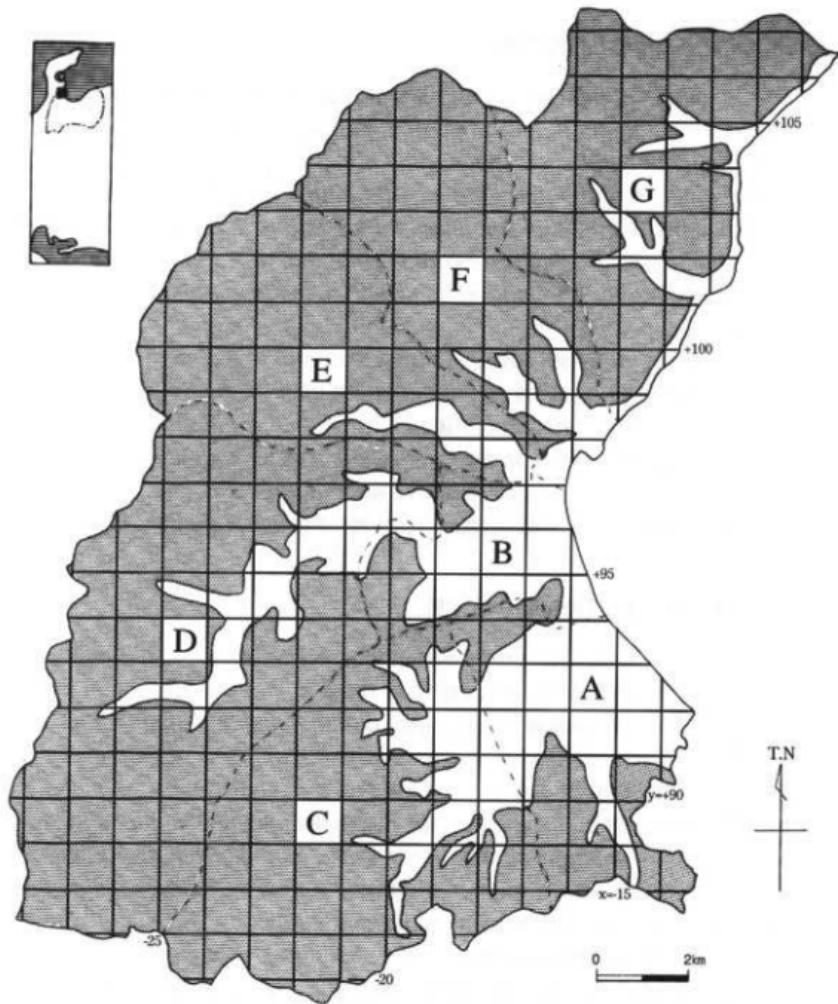
池田 幸代（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

坂本 研資（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

布尾 誠（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

小谷 超（氷見市教育委員会生涯学習課主任）

（表原孝好）



A 地区	1993年度調査地区	E 地区	1997年度調査地区
B 地区	1994年度調査地区	F 地区	1998年度調査地区
C 地区	1995年度調査地区	G 地区	1999年度調査予定地区
D 地区	1996年度調査地区		

第1図 氷見市の地勢と地区割図（国土座標 X = 138°59'55", Y = 35°48'00"を基準とする）

3 水見市の地勢と自然環境

水見市は、富山県の北西部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く水見郡1町17村が合併し、現在の水見市が成立した。面積は約230平方km、人口は約6万人である（第1図）。

市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は富山湾に面している。丘陵の大部分は新第三紀層から成り、山脚部では地滑りが多い。市北半部は、上庄川・余川川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外は、まとまった平野が少ない。市南半部は、かつてラグーンであった平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

市街地は、海岸線のはば中央に位置し、近年は北と南に広がりつつある。鉄道は水見と高岡を結ぶJR水見線が通り、主要道路では、高岡市と石川県七尾市を結ぶ一般国道160号と、富山市と石川県羽咋市を結ぶ一般国道415号が通る。

代表的な産業は、稲作を中心とした農業と、ブリ定置網に代表される漁業であるが、近年は第二・三次産業就業者が多く、高岡市など市外へと通勤する人が多い。

一方能登の観光地として、市内には旅館・民宿が建ち並び、近年は温泉も市内各地で噴出している。

4 1998年度調査区の地勢と地区割

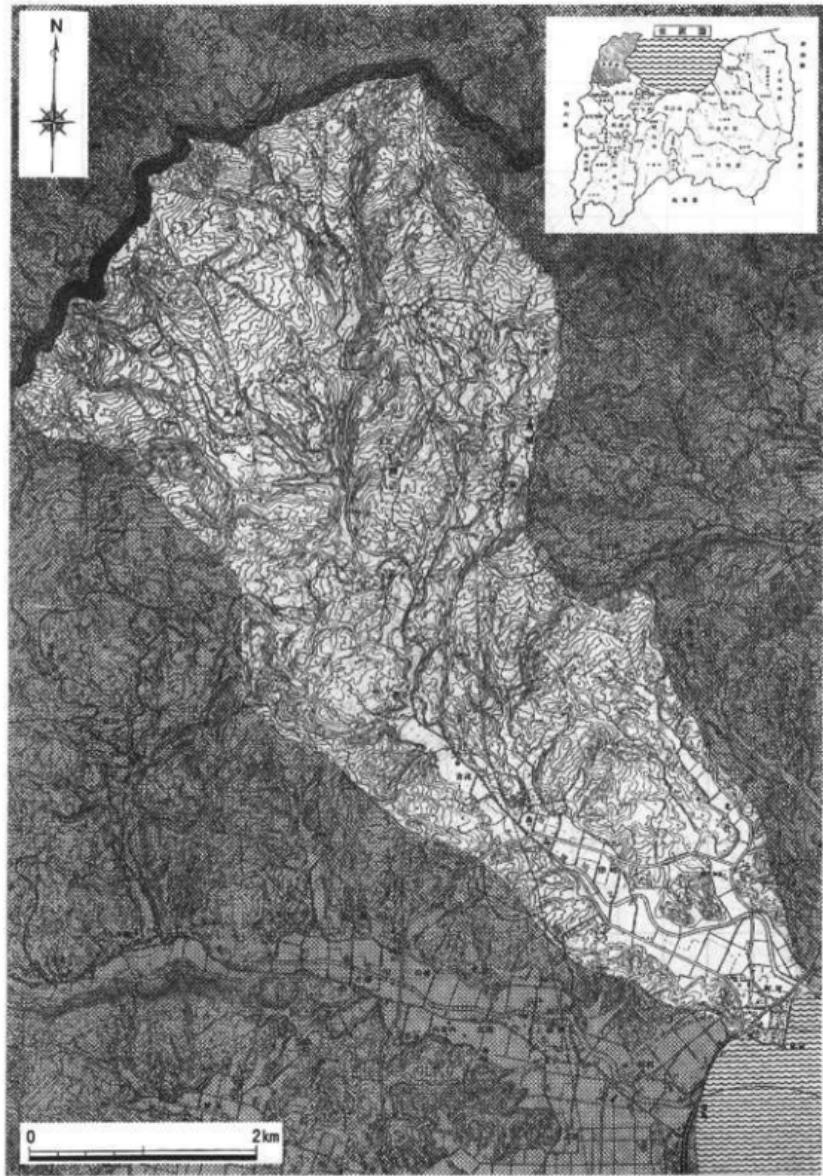
本年対象とするF地区は八代谷と呼ばれる地区であり、市域の北部にあたる。調査は踏査によるものとし、対象は平野部と丘陵部の農地とした（第2図）。

F地区は阿尾川とその支流域にあたる。阿尾川は石川県との境に近い山地に発し、約8kmで富山湾に至る河川である。その上流の丘陵部は地滑り地帯であり、起伏の穏やかな所に集落が点在する。中流域は細長い谷地形であり、下流域にややまとまった平野が広がる。

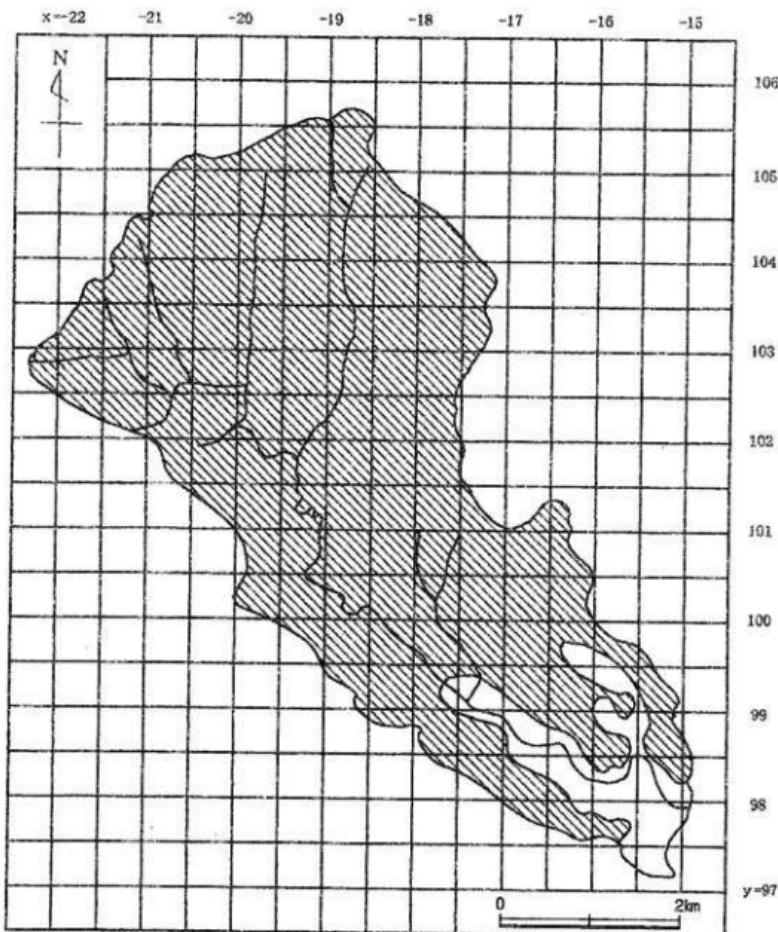
丘陵部は、地滑り地帯ということもあり、遺跡の状況は城郭や中世墓を除いてほとんど状況が不明である。一方平野部については国道バイパス建設に先立ち、いくつかの遺跡の発掘調査が実施されている。阿尾川沿いに荒山峠に向かう道筋は、越中と能登を結ぶ陸のルートであり、また本地区内には箭代神社・磯辺神社という二つの式内社が鎮座する。

現地調査は、調査区は丘陵尾根、道路などによって大別・細別して実施した。そしてその結果を水見市都市計画図座標に沿って国土座標X=138°59'55", Y=35°48'00"を原点とする一方500mの方眼を単位として集計し（第3・4図），時期別の採集遺物量を図示して、遺跡の盛衰と立地の変化を把握する基礎資料とした（第5～10図）。なお提示した座標値は方眼の北東角の座標値である。

（大野 実）



第2図 F地区図（縮尺 1/50,000）



第3圖 F 地區地圖

第2章 分布調査の成果

1 遺跡と採集遺物

(1) 荒山城跡 (図版9の1, 氷見市遺跡地図第2版11) 氷見市小滝

本遺跡は氷見市小滝の北方の山上、越中と能登の国境に所在する。標高486mの山頂から尾根伝いに、西方は荒山峠、東方は石動山へと連続する。山頂はほぼ方形の削平地（主郭）であり、尾根が南西・北西・東の三方向に伸びている。主郭の南西には、削平地が二段に続き尾根上に堀切が1個所確認されている。主郭の北から西にかけては、削平地が二段めぐり、最下段には幅4m、深さ1.5mの空掘を備える。天正10年（1582）の石動山合戦では、温井・三宅氏らが石動山衆徒と結んで城を修築しようとした。しかし、その途中に前田利家・佐久間信盛らに急襲され落城した。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（阿部 来）

(2) 尾端城跡 (図版10の2, 氷見市遺跡地図第2版12) 氷見市中田浦

本遺跡は標高340mの山上に立地する。20m四方の平坦地であり、北に石動山大御前を望む。この平坦地は「トオミ」と呼ばれており、平坦部の規模から、のろし台あるいは見張り台の機能が推測されている。現在確認されている遺構は頂上平坦部の南側斜面にある上端部幅約4m、下底部幅約2m、長さ約25mの東西方向に伸びる空堀のみである。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（井出靖夫）

(3) 碓辺明円遺跡 (図版11の3, 氷見市遺跡地図第2版14) 氷見市碓辺字北山明円垣内

本遺跡は碓辺部落の北方で胡桃への道路から少し北側の山中にに入ったところ、東西が小さい谷に臨んだ南北にやや広い台地に立地する。標高は約80mを測る。過去に表面採集が行われ、打製の石斧・石匙が田中貞三氏方に保管されている。また縄文土器の小片も採集されている（富山県立氷見高等学校歴史クラブ1964）。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（片桐清恵）

(4) 碓部神社中世墓 (図版11の4, 氷見市遺跡地図第2版117) 氷見市碓辺

本遺跡は阿尾川の左岸にある碓部神社境内に所在する。標高は約65mを測る。過去に珠洲が出土し中世墓と推定されているが、詳細は不明である。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（片桐清恵）

(5) 碓辺中世墓 (図版12の5, 氷見市遺跡地図第2版137) 氷見市碓辺

本遺跡は碓部神社から南西に約500m離れた山裾の平坦部に所在し、標高は約50~60mを測る。中世墓として推定されているが、詳細は不明である。現在は山林となっている。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（瓜生日奈子）

(6) 森寺城跡 (図版13の6, 氷見市遺跡地図第2版19) 氷見市森寺

本遺跡は阿尾川の中流左岸、八代谷の中ほどにそびえる山上（小字「城山」）に立地する。

標高約160mであり、城の規模は250m×600mを測る。このように城地は広大であり、要所には石垣も築かれるなど、氷見市内唯一の城郭遺跡として知られる。文献によると、能登守護畠山義統が越中の番城として築いた説、さらに畠山義統の孫、遊佐統光が築いたという説がある。15世紀頃に築城、隨時改修されていった。なお本遺跡は現在、氷見市指定史跡である。

(川端良招)

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(7) 海老瀬城跡 (国版14の7、氷見市遺跡地図第2版20) 氷見市余川

本遺跡は余川谷と八代谷の境をなす丘陵上に立地し、北方に森寺城、南方には木谷城を望むことができる。本城は北と西を急な斜面に守られた山頂部の一辺に築かれており、土塁で仕切られた三郭と、土塁・空堀が存在する。城主については明らかではないが、長沢善慶が居城したとも、前田氏に従った阿尾城主菊池武勝が一時居城したとも伝えられている。また城のすぐそばを尾根伝いに「一朝往来」(街道)が通っており、こうした山街道との密接な関係が指摘されている(高岡・久保1980)。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(瓜生日奈子)

(8) 指崎向山古墳群 (国版14の8、氷見市遺跡地図第2版21) 氷見市指崎字向山

本遺跡は北方を阿尾川、南方を余川で限られた丘陵の阿尾山寄り、海岸から約2kmの指崎地内、標高約40mのところに所在する。現在はところどころ開拓されて畠地になっているが、大部分は雑木と雑草が茂っている。これまでに須恵器数片、直刀1振、管玉7個が採集されている(富山県立氷見高等学校歴史クラブ1964)。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(八巻謙司)

(9) 指崎五反田遺跡 (国版15の9、氷見市遺跡地図第2版105) 氷見市指崎

本遺跡は阿尾川左岸に位置し、標高は約14mを測る。これまでに古代の須恵器片および土器片が採集されており、現在は水田として利用されている。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(塚田直哉)

(10) 指崎諏訪野遺跡 (国版14の10、氷見市遺跡地図第2版132) 氷見市指崎

本遺跡は阿尾川沿いの水田に立地する中世の遺跡である。標高約10mを測る。遺跡の東方の丘陵には八代城が所在する。過去に中世土器が表面採集されている。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(阿部 来)

(11) 八代城跡 (国版15の11、氷見市遺跡地図第2版122) 氷見市北八代

本遺跡は阿尾川左岸の標高約60~80mの山上に築かれた中世の山城である。現在は、山林である。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(塚田直哉)

(12) 阿尾島尾山砦跡 (国版16の12、氷見市遺跡地図第2版26) 氷見市阿尾

本遺跡は余川谷と八代谷に挟まれた丘陵上に所在する。二つの高まりから成り、標高は北西の高まりが52.4m、南東の高まりが49.1mを測る。

平成5年度に発掘調査され、平坦面が4箇所と掘切、堅堀が確認されている。このときの発掘

調査により本遺跡には、建物などの施設があったとは考えられず、阿尾城の付属施設としての見張り場所として機能していたと考えられている。また遺物は近・現代の磁器片が2点出土している（水見市教育委員会1996a）。現在は山林および墓地として利用されている。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。
(井出靖夫)

03 阿尾島尾A遺跡（図版16の13、水見市遺跡地図第2版181）水見市阿尾

本遺跡は水見市街地北部の阿尾川下流右岸の微高地に立地し、海岸線から約300mの地点に所在する。標高は5mを測る。一般国道160号水見バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財試掘調査により発見され、1990～1992年に発掘調査が行われた（水見市教育委員会1990・1991・1993a）。

遺物として縄紋時代の土器・石器、古代の須恵器・土器、中世の珠洲・越前・青磁・白磁・瀬戸・瀬戸美濃・漆器、近世の肥前陶磁器、包含層からは棒状尖底製塙土器・土製紡錘車・土鉢などが出土している。中心とされる時代は古代、次いで中・近世である。

遺跡一帯は昭和48年に圃場整備が行われ、遺物の大部分は搅乱を受けた包含層からの出土である。現在は水見バイパスの一部、宅地、水田として利用されている（水見市教育委員会1991・1993a）。

今回の調査で採集した遺物も宅地造成上からのものである。また遺物採集の結果から遺跡の範囲を拡大することになった。弥生・古墳時代の土器13片、古代の須恵器21片・土器1片、中世の珠洲4片・瀬戸1片・土器1片、近世の越中瀬戸3片・磁器1片・陶器2片、時期不明の土器9片を採集し、そのうち弥生・古墳時代の土器2点、古代の須恵器15点、中世の珠洲4点、瀬戸1点、土器1点、近世の越中瀬戸3点、陶器1点を図示した（図版3）。

1は須恵器の杯の口縁部であり、口径は約10cmを測る。口縁部残存率は1/12である。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

2は須恵器の蓋であり、外面に範削りを施している。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

3は須恵器の蓋の口縁部であり、口径は約15cmを測る。口縁部残存率は0.8/12である。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

4は須恵器の杯の底部であり、底径は約6.5cmを測る。胎土は密であり、0.5mmの砂粒、1～2mmの小石、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

5は須恵器の杯の底部であり、底径は7cmを測る。胎土は密であり、1～3mmの小石を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

6は須恵器の杯の底部であり、底径は8.3cmを測る。胎土は密で、1～2mmの小石を含む。色調は暗灰色を呈する。焼成は良好である。

7は須恵器の杯の底部であり、底径は7.4cmを測る。胎土は密であり、0.1mm程度の砂粒、海綿状骨針を含む。色調は灰色を呈し、焼成はやや不良である。

8は須恵器の杯の底部であり、底径は約8.4cmを測る。胎土は密であり、1～3mmの小石を含む。色調は暗灰色を呈する。焼成は良好である。

9は須恵器の杯の底部であり、底径は約7cmを測る。底部は荒切り後、軽い撫でを施している。胎土は密であり、1~2mmの小石を含む。色調は暗灰色を呈し、焼成はやや不良である。

10は須恵器の杯の底部であり、底径は約10cmを測る。胎土は密であり、1~2mmの小石を含む。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

11は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

12は須恵器の壺の頭部に近い体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

13は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。

14は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

15は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

16は土器の皿の口縁部である。時期は15世紀末である。口径は約14cmを測り、口縁部残存率は1.3/12である。胎土は密であり、色調は、内面は黒褐色で外面は赤褐色を呈する。焼成は良好である。

17は土器の杯である。時期は古墳時代後期である。口縁部に油煙が付着している。口径は約8.8cmを測り、口縁部残存率は2/12である。胎土は密であり、赤色粒、海綿骨針を含む。色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

18は珠洲の壺壺類の体部である。外面に叩き目を残す。胎土は密で、0.1mm程度の砂粒、1~2mmの小石、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。

19は珠洲の壺である。外面に叩き目を残す。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。焼成は良好である。

20は珠洲の壺壺類の体部である。外面に叩き目を残す。胎土は密で、0.1mm程度の砂粒、1~3mmの小石、海綿骨針を含む。色調は灰色を呈し、焼成はやや不良である。

21は珠洲の大壺の口縁端部である。胎土は密であり、色調は暗灰色を呈する。焼成は良好である。

22は土器の体部である。外面に崩毛目調整を施している。胎土は密であり、色調は黄褐色を呈する。焼成は良好である。

23は近世陶器のすり鉢である。内面に卸し目を施している。胎土は密である。素地の色調は赤褐色で、釉色は暗茶褐色を呈する。焼成は良好である。

24は瀬戸の小型器種の口縁部であり、口径は約10cmを測る。口縁部残存率は0.5/12である。胎土は粗であり、灰色の素地に淡緑色の釉薬が施されている。

25は越中瀬戸の徳利である。胎土は密であり、素地の色調は灰色で釉色は黄褐色を呈する。

焼成は良好である。

26は越中瀬戸の皿の底部であり、内底面に菊花文の押印を施す。底径は約4.8cmを測る。底部内外面を残し施釉している。胎土は密であり、色調は黄灰褐色を呈する。焼成は良好である。

27は越中瀬戸の皿の底部である。高台を削り出しており、底径は4cmを測る。胎土は密であり、色調は乳褐色を呈し、焼成は良好である。

(不嶋美穂・的場茂晃)

04 阿尾島尾B遺跡（国版16の14、水見市遺跡地図第2版182）水見市阿尾

本遺跡は水見市街地北部の阿尾川下流右岸の微高地に立地し、阿尾島尾A遺跡の北東約50mに所在する。標高は5mを測る。阿尾島尾A遺跡、阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡とともに一般国道160号水見バイパス建設工事に先立つ埋蔵文化財試掘調査によって発見され、繩紋上器、古代の須恵器・土器、中世の珠洲、近世の肥前磁器が少量出土している。現在は水見バイパスの一部、水田として利用されている（水見市教育委員会1991）。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(不嶋美穂)

05 阿尾遺跡（国版16の15、水見市遺跡地図第2版23）水見市阿尾543～4番地

本遺跡は、東を有磯海に面した台地に立地し、台地は南北43m、東西70m、標高5mを測る。南方には、阿尾城跡・阿尾城山横穴群が位置している。1962年に発掘調査が行われ、弥生終末期の高杯が出上している。

今回の調査では、弥生土器1片、古墳時代の須恵器1片、時期不明の土器13片を採集し、そのうち弥生土器1点を図示した（国版4）。

28は弥生土器の蓋であり、口径は11.4cmである。口縁部残存率は1/12である。外面には赤彩・磨き、内面には撫でを施している。胎土は精良であり、色調は淡赤褐色を呈する。焼成は良好である。

(川端良招)

06 阿尾城山横穴群（国版16の16、水見市遺跡地図第2版24）水見市阿尾城山4の1

本遺跡は水見駅北方約3kmの海に突き出た丘陵に立地し、この丘陵の南側と北側に所在する。本遺跡は北側においては標高25mを、南側においては標高16～18mを測る。北側は1基のみが発見されているが、南側では、4基残っている。これまでに採集されている遺物は金環・鉄鏽・刀子・須恵器等である。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

(山口欣志)

07 阿尾城跡（国版16の17、水見市遺跡地図第2版25）水見市阿尾字城山及び同字島尾

本遺跡は水見市街の北端、海に突出した南北約100m、東西約350m、標高20～44mの独立丘陵のほぼ全域を占めて立地する。海に面した断崖上に築かれたこの城は本県にも類例が無く注目される。東側と南側は海に接する断崖絶壁であり、西側も急斜面で陸地に続いている。現在、地図は畑地・山林・社地となっている。城跡のある丘陵の西麓からは、阿尾川沿いに八代谷を通り荒山越えに能登に至る古くからの主要街道があり、交通の要衝となっている。

これまでの調査から出土した遺物は、弥生時代後期のものと中・近世のものとに大別される。弥生時代の出土遺物は甕・壺・高杯・蓋等である。中・近世の出土遺物は土器・瓦器・瀬戸美

浪・中国製青花・珠洲・越中瀬戸等である。

弥生時代後期の遺物が出土したことから阿尾城跡は高地性集落である可能性をもつが、住居跡や防禦施設が確認されていないため、判断は保留されている（水見市教育委員会1993b）。

今回の調査では須恵器1点・土器1片、近世磁器1片を採集し、そのうち古墳時代の須恵器1点、近世磁器1点を図示した（図版4）。

29は近世磁器の皿の底部である。底径は34cmを測る。蛇の目状の釉剥ぎを施す。胎土は密で、色調は白色を呈する。

30は須恵器の短頸壺の肩部である。時期は6~7世紀である。外面に波状紋を施す。胎土は密であり、色調は灰褐色を呈する。焼成は良好である。（山口歓志）

⑩ 阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡（図版16の18、水見市遺跡地図第2版183）水見市阿尾瀬戸ヶ谷内
本遺跡は八代谷を流れる阿尾川河口左岸の丘陵の先端に位置する谷に立地する。1989年度の試掘調査で、現地表面の上に約2mの盛土がなされていることが判明した。これまでの分布調査で採集した遺物は、この盛土から採集したものと考えられ、その下の旧表土、及び青色粘土層から遺物は出土しなかった。したがって、本遺跡は二次的散布地であると判断されている（水見市教育委員会1991）。

今回の調査では、繩紋土器2片、弥生・古墳時代の土器1片、須恵器1片、時期不明の土器1片を採集し、そのうち繩紋土器2点、須恵器1点を図示した（図版4）。

31は繩紋土器である。胎土は粗であり、1~2mmの小石、海綿骨針を含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は不良である。

32は繩紋土器である。胎土は粗であり、1~2mmの小石、海綿骨針を含み、色調は淡褐色を呈する。焼成は不良である。

33は須恵器の壺であり、7~8世紀のものである。内面に同心円状の当て具痕を残す。胎土は密であり、色調は灰色を呈し、外面には自然釉が付着する。焼成はやや良である。

（表原孝好）

⑪ 阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群（図版16の19、水見市遺跡地図第2版22）水見市阿尾瀬戸ヶ谷内
本遺跡は山崎城跡がある丘陵の南東、南、西側中腹に所在したが、すでにほとんどが消失し、1基しか確認されていない。標高は22mを測る。6世紀後半から7世紀にかけてのものである。丘陵は現在山林であり、西側斜面は阿尾地区の共同墓地となっている。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（篠井史生）

⑫ 山崎城跡（図版16の20、水見市遺跡地図第2版89）水見市阿尾字瀬戸ヶ谷内
本遺跡は八代谷を流れる阿尾川河口左岸の海岸に面した丘陵に所在する。本城は南北約250m、東西約110mの範囲の丘陵尾根、延べ約300mにわたって築かれている。標高は37~51mであり、西側の谷との比高は30~44mを測る。この丘陵は、東・北側斜面が急峻であり自然の防禦となるのに対し、西・南側斜面が比較的穏やかである。このため、西南側には人工的な急斜面を造り出し、防禦力を高めている。

本遺跡は1991年度に発掘調査され、郭であろう平坦面が3個所確認された。これら平坦面を堀切・人工的な急斜面・カットなどにより防御している。虎口を一番南側のA郭の北側に設け、通路を通ってA郭に至るが、A郭では時期不明の集石遺構が検出されている。出土遺物は、中世土器、珠洲、越中瀬戸、近世以降の陶磁器、金属製品である（氷見市教育委員会1992）。

今回の調査では、遺物は採集できなかった。

（表原孝好）

⑩ 阿尾向田遺跡（図版16の21）氷見市阿尾字向田

今回の調査によって新たに発見した遺跡である。本遺跡は、八代谷を流れる阿尾川河口左岸の丘陵の裾、海岸から約100m、標高約4~8mのところに所在する。時期は弥生時代末・古代・中世である。今回の調査で採集した遺物は弥生・古墳時代の土器3片、古代の土器1片、中世の瀬戸1片である。そのうち古代の土器1点を図示した（図版4）。

34は灰釉陶器の器形を模した土器皿である。底部は糸切り後、高台を張り付けている。胎土はやや密であり海綿骨針、赤色粒、1~3mmの小石を含む。色調は淡橙色を呈し、焼成は不良である。

（表原孝好）

⑪ 指崎向山遺跡（図版14の22）氷見市指崎字向山

今回の調査によって新たに発見した遺跡であり、時代は古墳時代・古代・近世である。本遺跡は、前述した指先向山古墳群の南東に隣接する。

採集した遺物は、古代の須恵器4片、近世の越中瀬戸3片、時期不明の土器1片・鉄型1点である。そのうち8点を図示した（図版4）。

35は土器であり、時期不明である。内外面ともに摩滅が著しい。胎土はやや密である。色調は褐灰色を呈する。焼成は良好である。

36は須恵器である。内面に刷毛目調整を施す。胎土は密であり、色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

37は須恵器の蓋である。胎土は密であり、色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

38は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に同心円状の当て具痕を残す。胎土は密であり、海綿骨針を含む。色調は青灰色を呈する。焼成は良好である。

39・40・41は越中瀬戸の骨壺である。釉薬は施されていない。胎土はやや粗であり、石英を多く含む。色調は灰褐色を呈する。焼成はやや良好である。

42は鉄型の可能性がある淡褐色の土製品である。径は9.5cmを測る。表面は同心円状に二重の輪線が巡っており、中央が突出している。表面に被熱痕がある。

（八巻謙司）

㉓ その他の採集遺物

本調査では遺跡として設定した地区外の採集品についても、将来的な遺跡発見の可能性を高めるため、すべて採集地点を記録・報告している（図版9~19）。これらのうち、主なものについて示す（図版5）。

43は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に同心円状の当て具痕を残す。胎土はやや密であり、色調は灰色を呈し、焼成は良好である（x = -15.0, y = 98.0）。（小嶋美穂）

44は須恵器の壺の体部である。外面に平行叩き目、内面に当て具痕を残す。胎土は密であり、色調は灰色を呈し、焼成は良好である ($x = -17.5$, $y = 99.5$)。 (川嶋良招)

45は越中瀬戸の托の口縁部であり、口径は9.6cmを測る。口縁部残存率は1/12である。胎土は密である。素地の色調は灰色を呈し、内面に褐色の釉を施す。焼成は良好である ($x = -18.5$, $y = 100.5$)。 (瓜生日奈子)

46は越中瀬戸の黒色鉄釉の向付である。口縁部残存率は2.9/12である。時期は16世紀末から17世紀初頭のものと考えられる。胎土は密であり、色調は灰色を呈する。焼成は良好である ($x = -16.5$, $y = 98.5$)。 (八谷謙司)

47は近世磁器の碗の体部であり、17世紀前半のものである。口径は約11cm、器高は7cmと推測でき、吳須による植物文様を施している。胎土はやや粗であり、黒色粒を含む。色調は灰色を呈する。焼成は不良である ($x = -19.5$, $y = 104.5$)。 (阿部 来)

48は近世磁器であり、器種は不明である。胎土は密であり、色調は白色を呈する。焼成は良好である ($x = -16.5$, $y = 98.5$)。

49は寛永通宝3枚が接着している。表面は鋳も少なく、字も読み取ることができる。一文銭の「3期」(新寛永: 1697~1747, 1767~1781年)のものと考えられる(永井 1996) ($x = -16.5$, $y = 98.5$)。 (八谷謙司)

50は越中瀬戸の骨壺の蓋である。口径は約8.5cmを測る。口縁部残存率は1.3/12である。釉薬は施していない。胎土は密であり、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である ($x = -19.5$, $y = 103.5$)。 (衣原孝好)

51は越中瀬戸の骨壺の蓋である。口径は約14cmを測り、口縁部残存率は1.1/12である。内外面ともに輪軸撫で彫紋を施している。胎土はやや粗であり、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である ($x = -18.5$, $y = 104.0$)。 (井出靖夫)

52は越中瀬戸の骨壺の蓋である。口径は約12.4cmを測る。口縁部残存率は0.5/12である。釉薬は施していない。胎土は密であり、色調は淡褐色を呈する。焼成は良好である ($x = -19.5$, $y = 103.5$)。 (衣原孝好)

53は肥前磁器の碗の口縁部である。口径は約10cmを測る。口縁部残存率は1.1/12である。外面に文様を施している。胎土は密であり、色調は白色を呈する。焼成は良好である ($x = -17.5$, $y = 102.5$)。

54は肥前磁器の碗の口縁部である。口径は約10cmを測る。口縁部残存率は1.7/12である。内外面に文様を施している。胎土は密であり、焼成は良好である ($x = -17.5$, $y = 102.5$)。 (片桐清恵)

55は幅3mm程度の刻み目と径約0.6~1.2cmの穿孔を有する凝灰岩製の石製品である。色調は灰褐色を呈し、鋳型の可能性が考えられる ($x = -19.0$, $y = 104.5$)。 (阿部 米)

2 遺物の散布状態

本年度はF地区において縄紋時代から近世に至る115破片・口縁部1.50個体分の遺物を採集した。その遺跡・採集地点毎の詳細は、前節において述べている。

本節では、これらの採集資料を歴史資料として活用するために、時期別に大別し、口縁部計測法による個体数の計算と破片数計算法とにより個体数を計算し(宇野1992)、その散布状態の傾向について示すことにする。時期別の総量は、縄紋時代が2片、弥生・古墳時代が20片・0.25個体分、古代が29片・0.15個体分、中世が8片・0.18個体分、近世が26片・0.92個体分である。また時期不明の遺物を29片採集した。

(1) 縄紋時代遺物の散布状態(第5図)

縄紋時代の遺物は、土器2片を1地区から採集した。

F地区の縄紋時代の遺跡は調査区南東部と内陸平野部で確認されているが、今回の調査では阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡において2片の縄紋上器を採集している。

(2) 弥生・古墳時代遺物の散布状態(第6図)

弥生・古墳時代の遺物は、土器18片・0.25個体分、須恵器2片を5地区から採集した。

弥生時代の遺跡は阿尾地区を中心に3個所を確認し、古墳時代の遺跡は、今回の調査で確認した指先向山遺跡を含め、4個所確認されている。

今回の調査では、阿尾鳥尾A遺跡において13片と、多くの遺物を採集した。

(3) 古代遺物の散布状態(第7図)

古代の遺物は、須恵器28片・0.15個体分、上器1片を5地区から採集した。古代の遺跡は、主に阿尾川流域の平野部に位置している。

今回の調査で採集した遺物の多くは弥生・古墳時代の採集遺物と同様に、阿尾鳥尾A遺跡において21片を採集した。

(4) 中世遺物の散布状態(第8図)

中世の遺物は、珠洲5片・0.04個体分、瀬戸1片・0.04個体分、土器1片・0.10個体分を2地区から採集した。

中世になると遺跡の分布は丘陵にも広がり、調査区一帯に遺跡が見られるようになる。中世において、本調査区が交通の要所であったことが、その要因の一つと考えられる。

中世の遺物は、阿尾地区に位置する遺跡から採集されたものである。

(5) 近世遺物の散布状態(第9図)

近世の遺物は、越中瀬戸12片・0.56個体分、近世陶器4片、近世磁器10片・0.36個体分、占銭3枚を10地区から採集した。

近世では遺跡数は大幅に減少するが、遺物は一定量が広く散布する。近世になり、村落が散在したためと考えられる。

(6) 小 結

各時期の遺物の散布状況は以上の通りであり、まとめると以下のようになる。

本地区の遺跡は平野部・丘陵部に縄文時代から中・近世までの各時期の遺跡が、丘陵部には中世の城と近世の遺跡が主に立地している。

縄文時代の遺跡は調査区南東部と内陸平野部で確認している。磯辺明円遺跡と阿尾島尾A遺跡、阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡の3箇所である。今回の調査で、遺物は、阿尾川の河口に位置する阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡から2片出土した。しかし、阿尾地区ではわずかに土器片が散布するのみであり、縄文時代の詳細な様相は不明である。

弥生時代の遺跡としては阿尾城跡・阿尾遺跡・阿尾向田遺跡の3箇所を確認し、その全てが、調査区南東部の阿尾地区に所在している。以前に月影式の土器が出土した阿尾城跡からは、今回の調査で須恵器・土器を採集した。

古墳時代の遺跡の分布は二つの地区に大別できる。一つの地区は指崎向山遺跡・指崎向山古墳群が所在する指崎地区であり、もう一つの地区は阿尾遺跡・阿尾城山横穴群・阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群が所在する阿尾地区である。そのうちでも、指崎向山古墳群からは、13基以上と推定できる古墳が確認され、時期は6世紀中葉頃と考えられている。また6世紀後半から7世紀にかけては、阿尾城山横穴群・阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群が営まれる(水見市教育委員会1990)。このように、古墳時代は遺跡が調査区各地において増加していく時期である。

古代の遺跡としては、平野部で3箇所、および今回の調査で確認した指崎向山遺跡が分布する。そのうち、阿尾島尾A遺跡からは須恵器・土器が出土している。遺跡は7世紀末から9世紀まで存続し、中心は8世紀にある。なお阿尾島尾A遺跡は、今回の調査で遺跡周辺より遺物を採集したため、遺跡の範囲を拡大することになった。

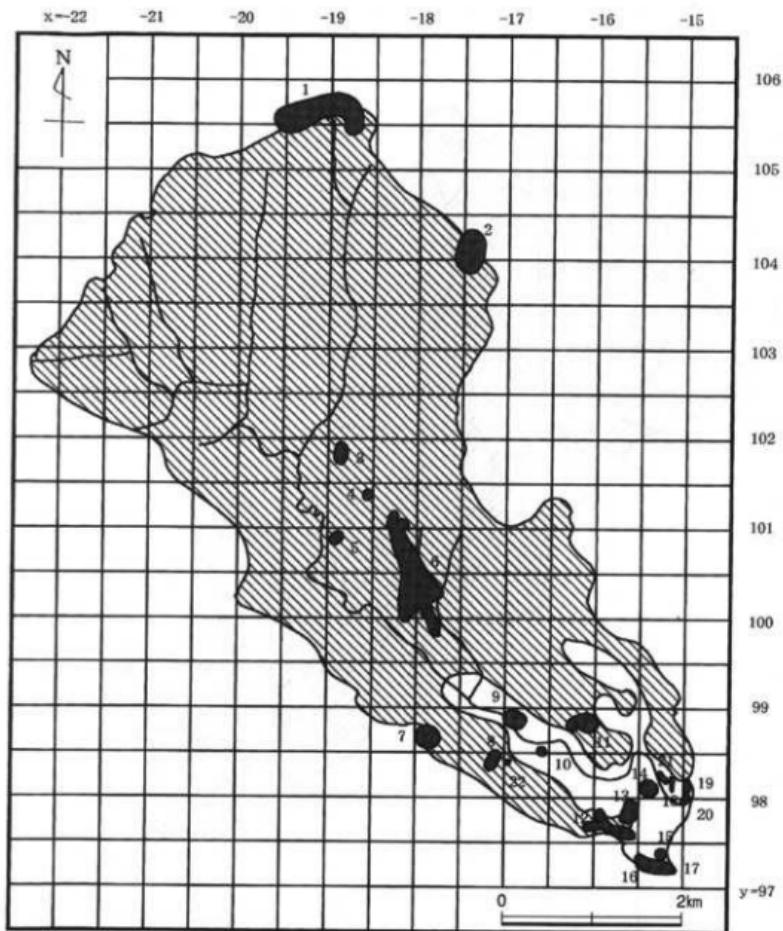
中世の遺跡は、丘陵に立地する城、中世墓、および、平野部、丘陵裾に立地する遺跡に二分できる。とりわけ阿尾地区では平野の遺跡に加えて、城・砦を築き、たびたび戦乱の舞台となっている。これは阿尾地区が、海沿いに能登内浦(東海岸)へ抜ける街道と、山沿いに荒山峠をこえて能登外浦(西海岸)へぬける街道の分岐点にあたり、軍事、経済上の重要な拠点であったためと考えられる。その阿尾地区には、県指定史跡として著名な阿尾城跡をはじめ、山崎城跡、八代城跡、三角山砦跡が阿尾川下流の平野を取り囲むように所在している。このうち時期のはっきりしているものは、16世紀後半頃の遺物を最も多く出土した阿尾城跡だけであり、他の城跡は不明である(水見市教育委員会1990)。

近世に入ると、本地区は遺跡数が減少し、阿尾島尾A遺跡と今回の調査で確認された指崎向山遺跡が所在するのみである。なお今回の調査により新たに確認した遺跡は下記の通りである。

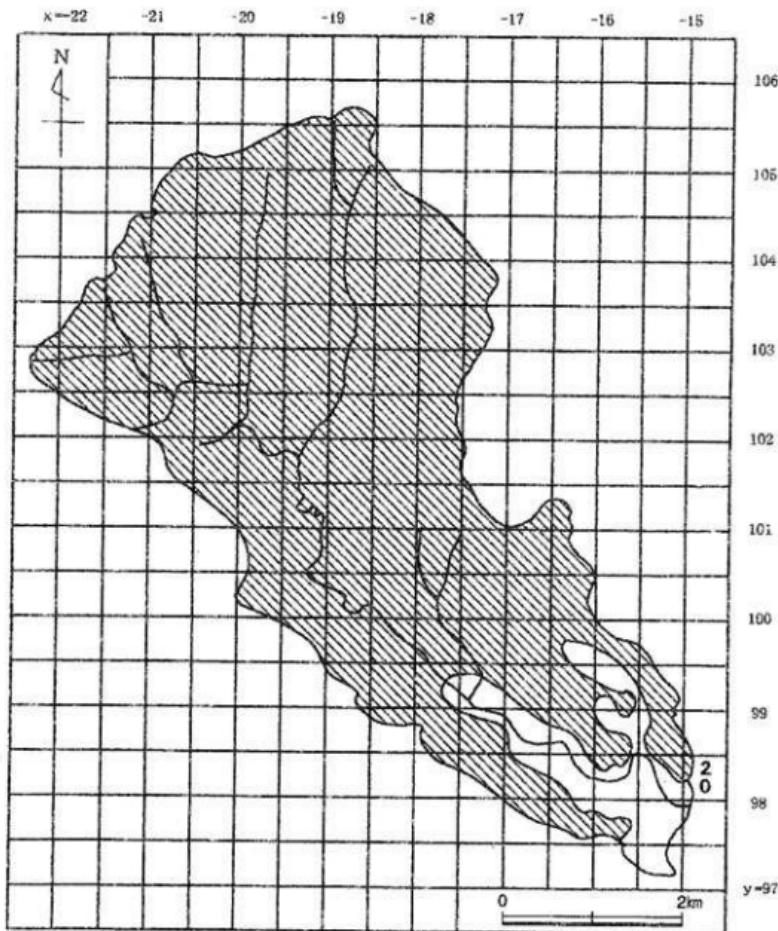
阿尾向田遺跡…弥生時代末・古代・中世 指崎向山遺跡…古墳時代・古代・近世

また阿尾島尾A遺跡、阿尾城跡、阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡は今回の調査により、範囲を広げた。

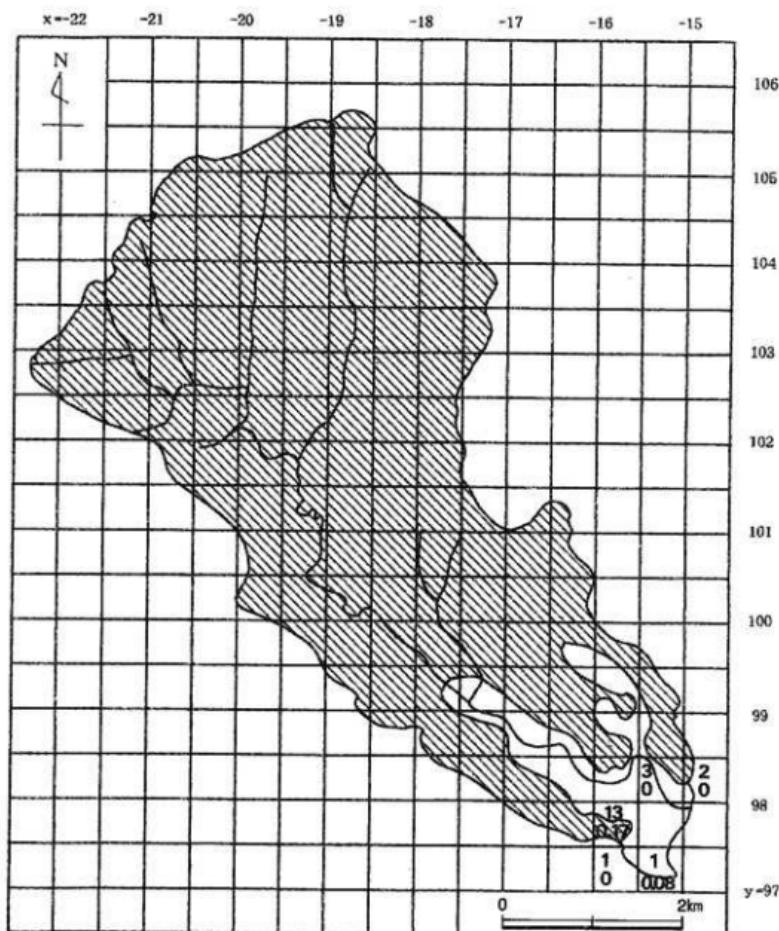
(片桐清忠・川端良招・山口欧志)



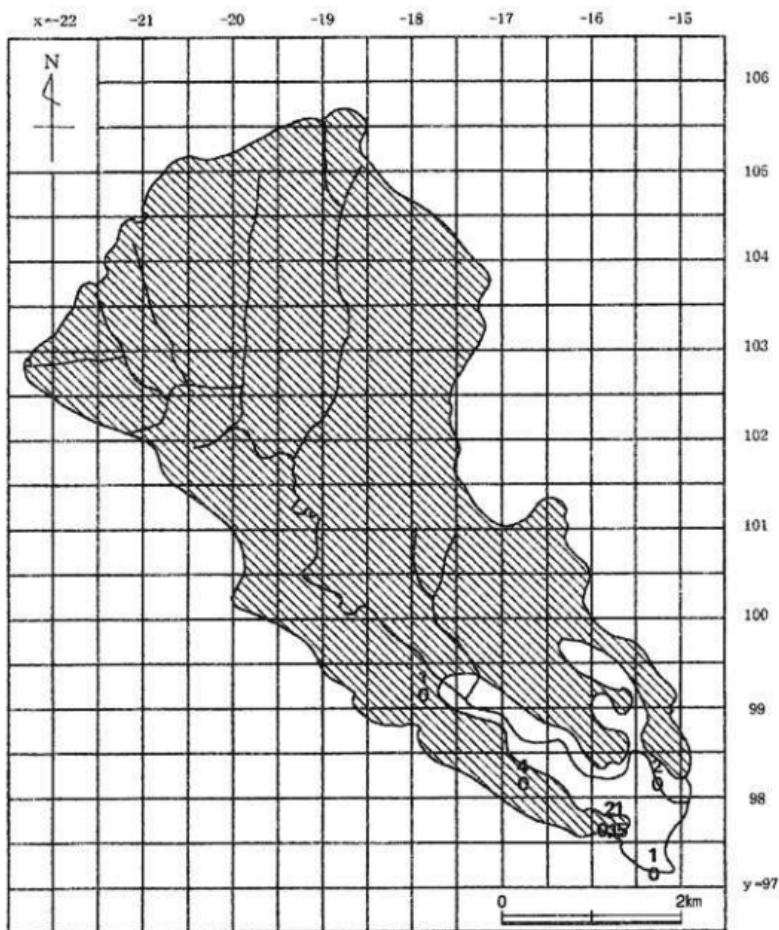
第4図 F地区遺跡分布図（遺跡名は図版9～18参照）



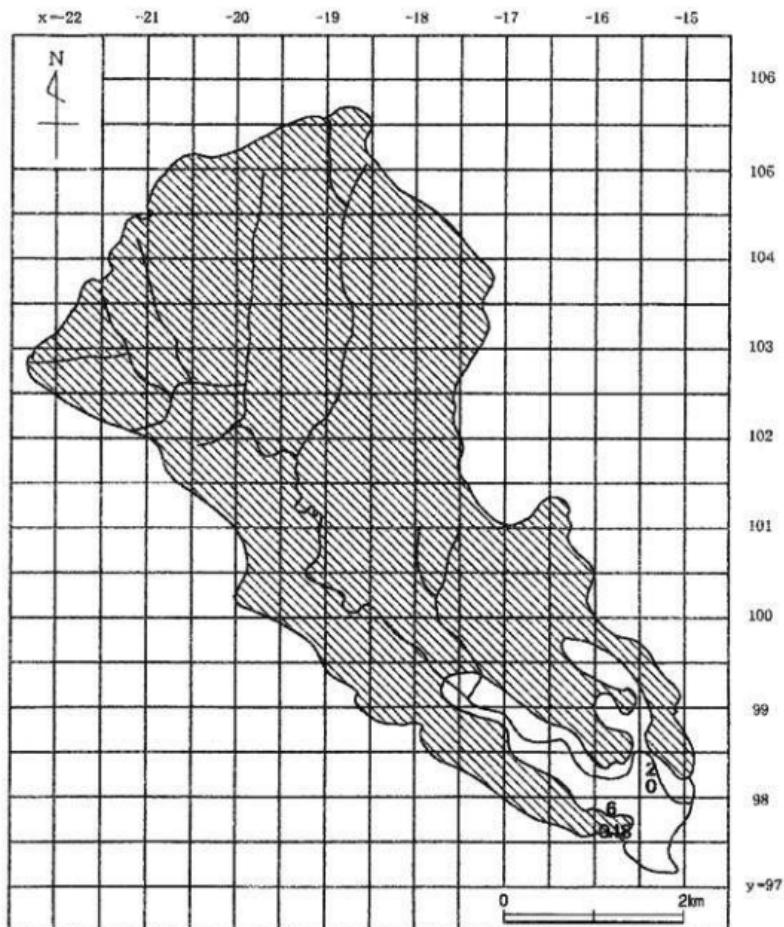
第5図 繩紋時代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



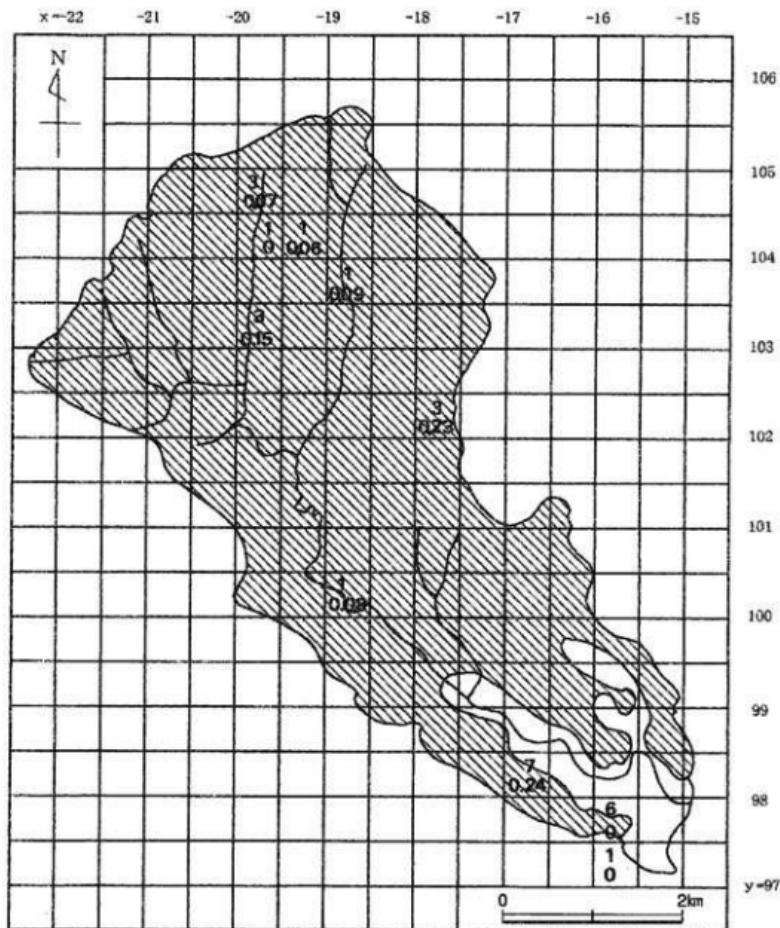
第6図 弥生・古墳時代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



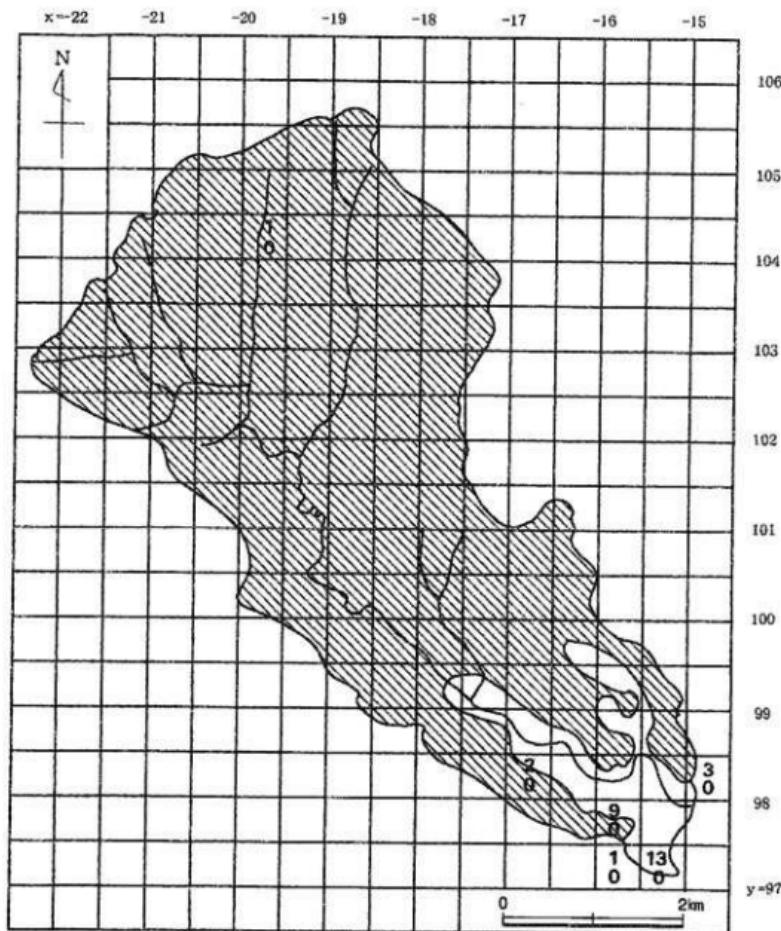
第7図 古代遺物の散布状態（上段：破片数、下段：山縁部個体数）



第8図 中世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第9図 近世遺物の散布状態（上段：破片数、下段：口縁部個体数）



第3章 おわりに

1998年度F地区遺跡詳細分布調査において、115破片・口縁部1.50個体分の資料を採集し、6個年の調査採集遺物の総量は、4,245片・25,464個体分となった。F地区においてこれまでに確認されていた遺跡総数は20遺跡であり、今回の調査で新たに2遺跡を確認したことから、F地区の遺跡総数は22遺跡となった。

F地区は水見市の中央北寄りにあたり、宝達丘陵に連なる支脈である丘陵に挟まれた谷地形を中心とする地域である。谷の間を流れる阿尾川は総長8kmほどの中級河川であり、河口付近には狭い平野部を形成している。

縄文時代の遺跡は海岸付近に2個所と内陸の丘陵部に1個所の計3個所を確認している。いずれも少数の遺物を採集しているのみであり、詳細は不明であるが、水見市内の他地域と同様に、内陸の丘陵部及び海岸近くの立地という共通点がある。これは、前期には網一枚海進により平野の奥地まで海域が広がっていたという状況が一変し、中期以降、海退が始まり（藤田1983），それに伴い海岸部に遺跡が営まれるようになって以降の遺跡であると考える。また海岸付近の立地は既に海産物資源の利用が始まっていたことを物語るものであろう。

弥生から古墳時代中期の遺跡はわずかに1個所、海岸付近で確認されている阿尾遺跡のみである。該期は本地区における遺跡の営みの中で空白期とも呼ぶべき時期である。阿尾遺跡は海岸線に接するという立地から、その営みは海産物資源および海上交通と密接な関係をもつものであったと推察する。

古墳時代後期に至ると、集落こそ確認されていないものの、古墳群及び横穴墓群が確認されており、一時的に滞っていた本地区における営みが活発化していく時期であると評価できる。なお横穴墓群はいずれも海岸線付近に立地しており、これらの墓の被葬者が海を強く意識し、その活動は海と深い関わりを有するものであったと考えられる。

古代に至り、本地区における集落の営みは活発化する。国道バイパス建設に伴う発掘調査によって確認された阿尾島尾A遺跡・同B遺跡はいずれも阿尾川河口付近の平野部に立地する。阿尾島尾A遺跡は既に発掘調査が実施されており、奈良時代の遺跡としては水見市域内においても比較的規模の大きな遺跡であると考えられ、今回の分布調査によって範囲はさらに拡大することが予想される。本遺跡の最盛期は奈良時代前半から中頃であり、塙や掘立柱建物の配置からは高い計画性が読みとれ、出土土器の中には、円面鏡や墨書き器、赤彩埴輪土器などを持ち（水見市教育委員会1993a）。これらのことから、本遺跡は単なる集落遺跡ではなく、郡衙の下位にあたるような役所的性格を有する遺跡であった可能性が考えられるであろう。なお本遺跡の所在する阿尾地区は大伴家持が「英達の浦に寄する白波いや増しに立ち重き寄せ来東風を疾みかも」の歌を詠んだ地と考えられており、実際に家持が見た、あるいは立ち寄った可能性が考えられ、古代の歴史を身近に感じさせる貴重な遺跡である（水見市立博物館1998）。

中世に至ってF地区内の遺跡数は急増し、中世の遺物および遺構が確認されている遺跡は14箇所を数え、その多くを城郭跡が占める。それは本地区が海沿いに能登内浦に抜けるルートと、阿尾川沿いに荒山峠に向かい能登外浦に抜けるルートの起点にあたることから、軍事・物流面で重要な位置を占めるからであると考えられる。県内唯一の、三方が海に面する崖で囲まれた城郭であり、県指定史跡でもある阿尾城をはじめとし、丘陵上に多くの山城が平野部を見下ろすように取り囲んでいることからも、この地区が戦略上重要な意味を有していたことが理解できる。

近世は確認されている遺跡数こそ少ないが、遺物の散布域は他のいかなる時代よりも拡大しており、今回採集した遺物の量も陶磁器が26片・0.92個体分、古銭3枚と數も多い。このことから、該期に至って平野部のみならず丘陵奥地にまで開発の手が及んだことが読みとれる。

F地区の遺跡は、細紋時代から古代を通じて海岸沿いの平野部に集中して立地する傾向があり、このことは本地区における人々の営為が常に海産物、海上交通など海と深く関わるものであったことを物語るものであろう。中・近世に至ると丘陵上にも多くの遺跡が立地するようになり遺物の散布域も広がるが、これは人々の生活の中で海に関わる比重が軽くなったということを意味するわけではなく、それを基本としながらも開発の手が内陸にまで及んでいく様子を表しているものと推察する。

分布調査には、発掘調査では得られない、地域全体の動向を知ることができるという大きな利点がある。7個年にわたる氷見市の詳細分布調査もあと1年を残すのみとなった。この調査によって氷見市域全体の人々の営みが時々の社会の動向といかに関わりあったかを考えるとともに、遺跡保護の一助とすべく来年度の調査に臨みたい。

(大塚純司・田中 学・宇野隆夫・前川 要・大野 実)

参考文献

- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史
民俗博物館
- 高岡 徹・久保尚文 1980 「富山県」「日本城郭大系」7 新潟・富山・石川、新人物往来社
- 富山県立氷見高等学校歴史クラブ 1964 「富山県氷見地方、考古学遺跡と遺物」氷見高歴史ク
ラブ報告書11
- 永井久美男 1996 『日本出土銭銅鑄造』兵庫埋蔵銭銅鑄造調査会
- 氷見市教育委員会・氷見市立博物館 1983 『氷見市遺跡地図』氷見市文化財所在地図1
- 氷見市教育委員会 1989 『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1990 『一般国道160号氷見バイパス 埋蔵文化財試掘調査報告Ⅰ』氷見市埋
蔵文化財調査報告書第11冊
- 氷見市教育委員会 1991 『一般国道160号氷見バイパス 埋蔵文化財試掘調査報告Ⅱ』氷見市埋
蔵文化財調査報告書第12冊
- 氷見市教育委員会 1992 『山崎城跡 阿尾瀬戸ヶ谷内横穴群』氷見市埋蔵文化財調査報告書第13冊
- 氷見市教育委員会 1993a 『阿尾島尾A 遺跡概報』氷見市埋蔵文化財調査報告書第15冊
- 氷見市教育委員会 1996a 『阿尾島田A 遺跡 阿尾島尾山砦』氷見市埋蔵文化財調査報告書第22冊
- 氷見市教育委員会 1993b 『県指定史跡阿尾城跡—文化財調査中間報告書—』
- 氷見市教育委員会 1994 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第16冊
- 氷見市教育委員会 1995 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第17冊
- 氷見市教育委員会 1996b 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第20冊
- 氷見市教育委員会 1997 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅳ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第23冊
- 氷見市教育委員会 1998 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告Ⅴ』氷見市埋蔵文化財調査報告書第25冊
- 氷見市立博物館 1998 『あおによし・しなざかる 平城京から越中へ』特別展図録
- 藤田富士夫 1983 『日本の古代遺跡』13 富山、保育社
- 宮川進一 1988 『越中瀬戸の窯資料(1)』『大境』 第12号、富山考古学会

図 版

図版一 F地区の航空写真（二）



1963年撮影（縮尺 1/30,770）

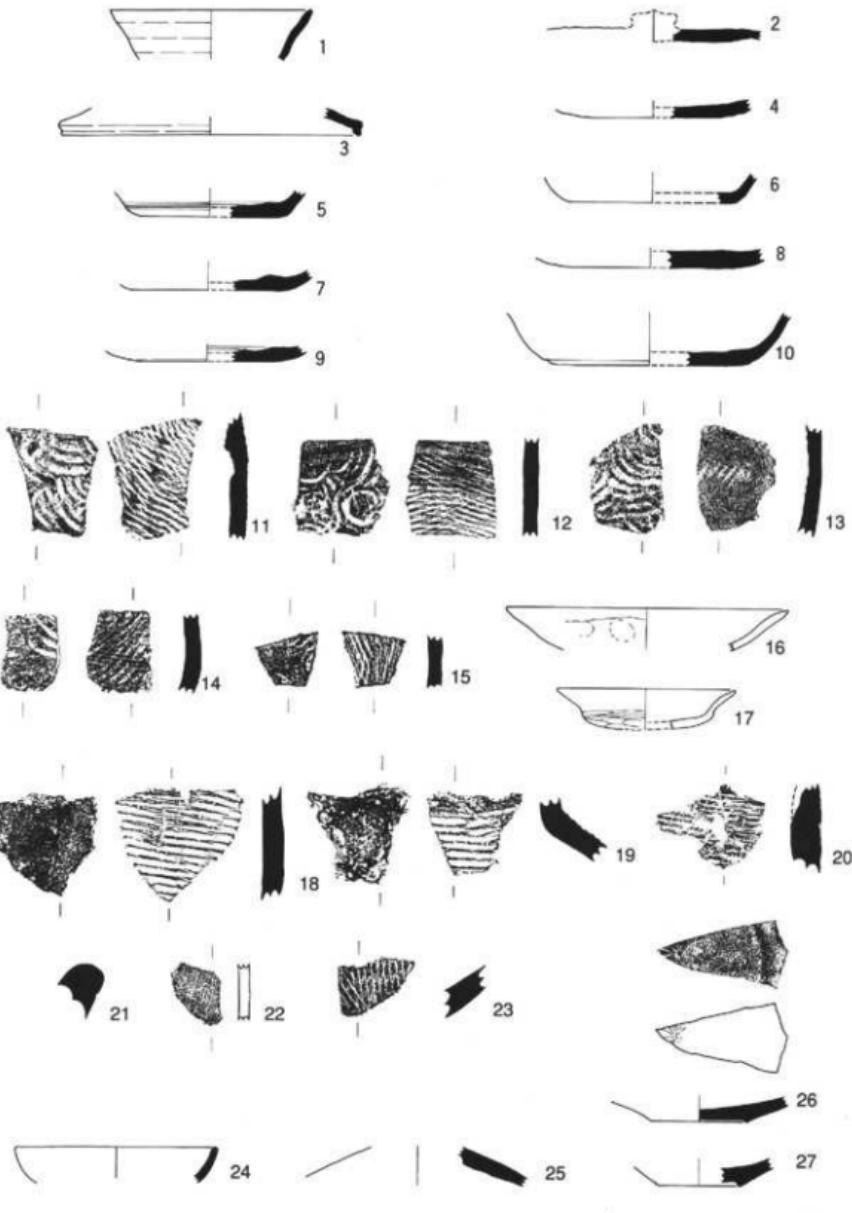


図版二 F地区の航空写真(二)



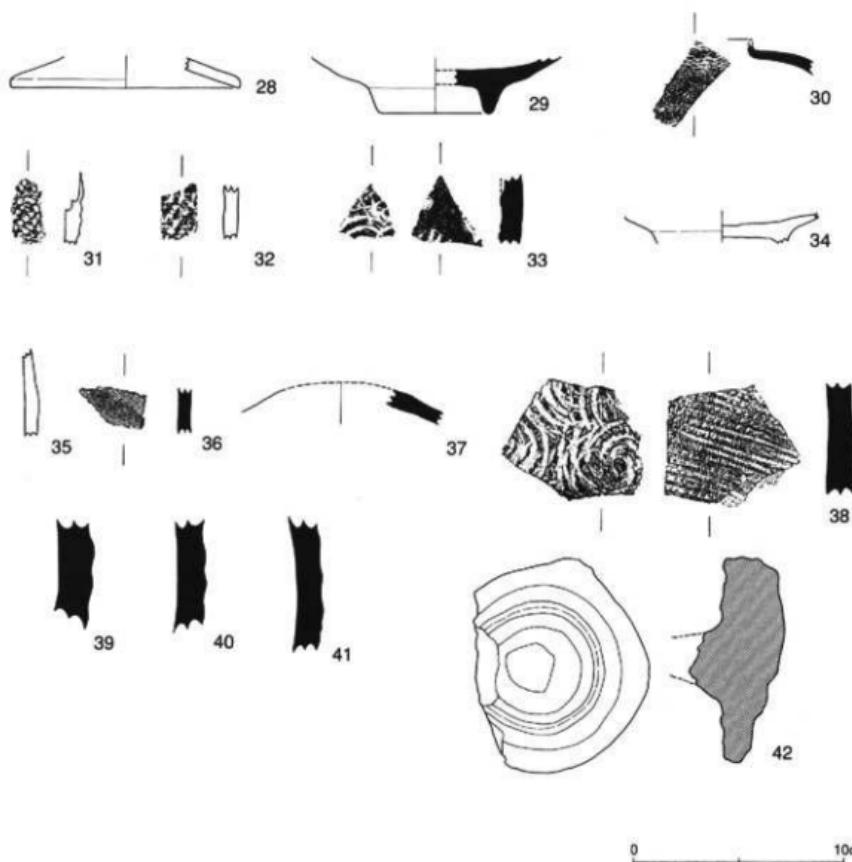
1992年撮影 (縮尺 1/30,770)

図版三 遺物実測図(二)



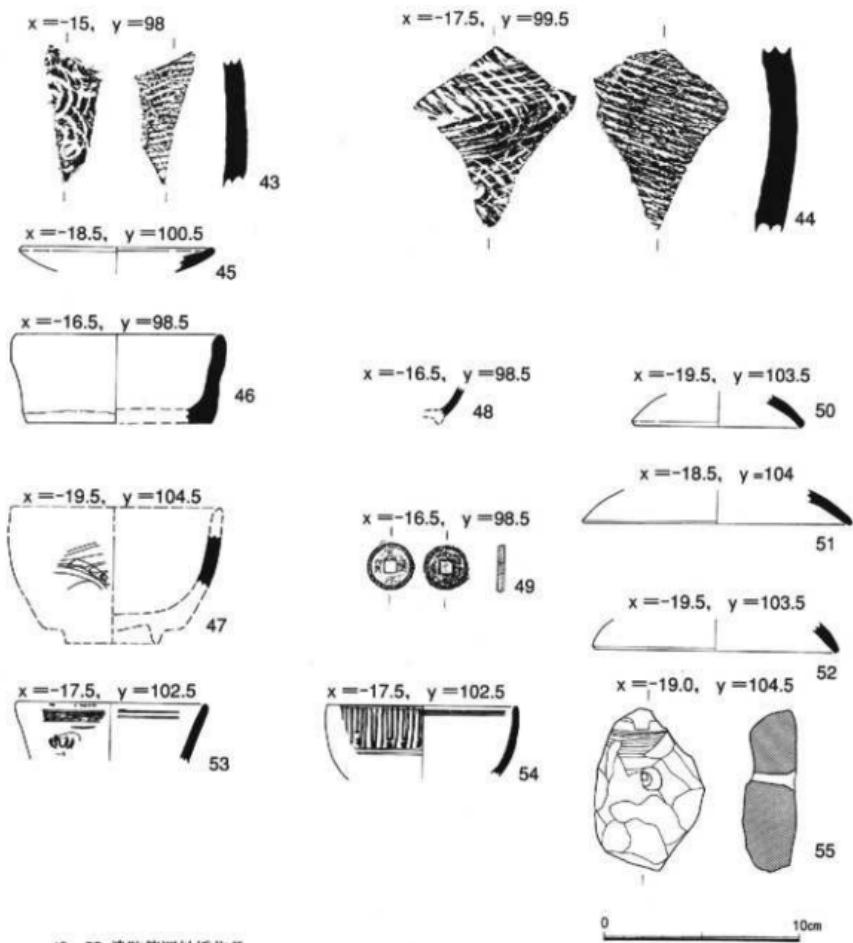
1~27 阿尾島尾A遺跡

図版四 遺物実測図 (一)

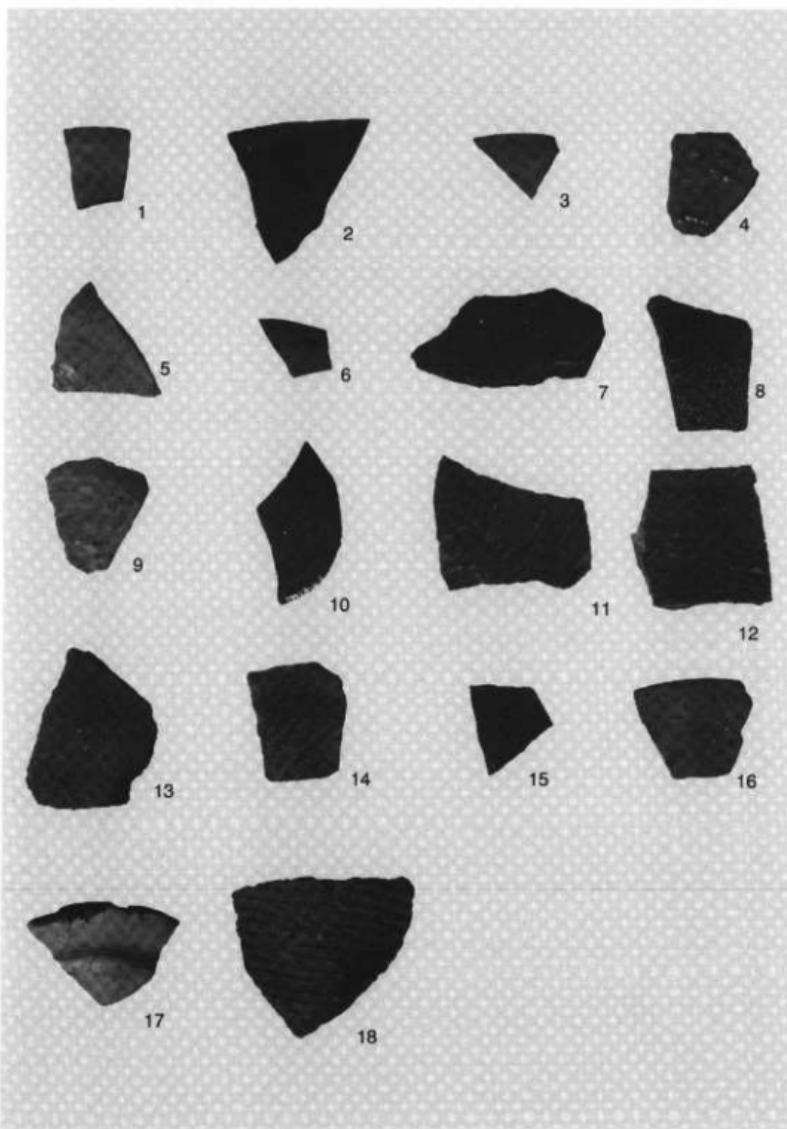


0 10cm

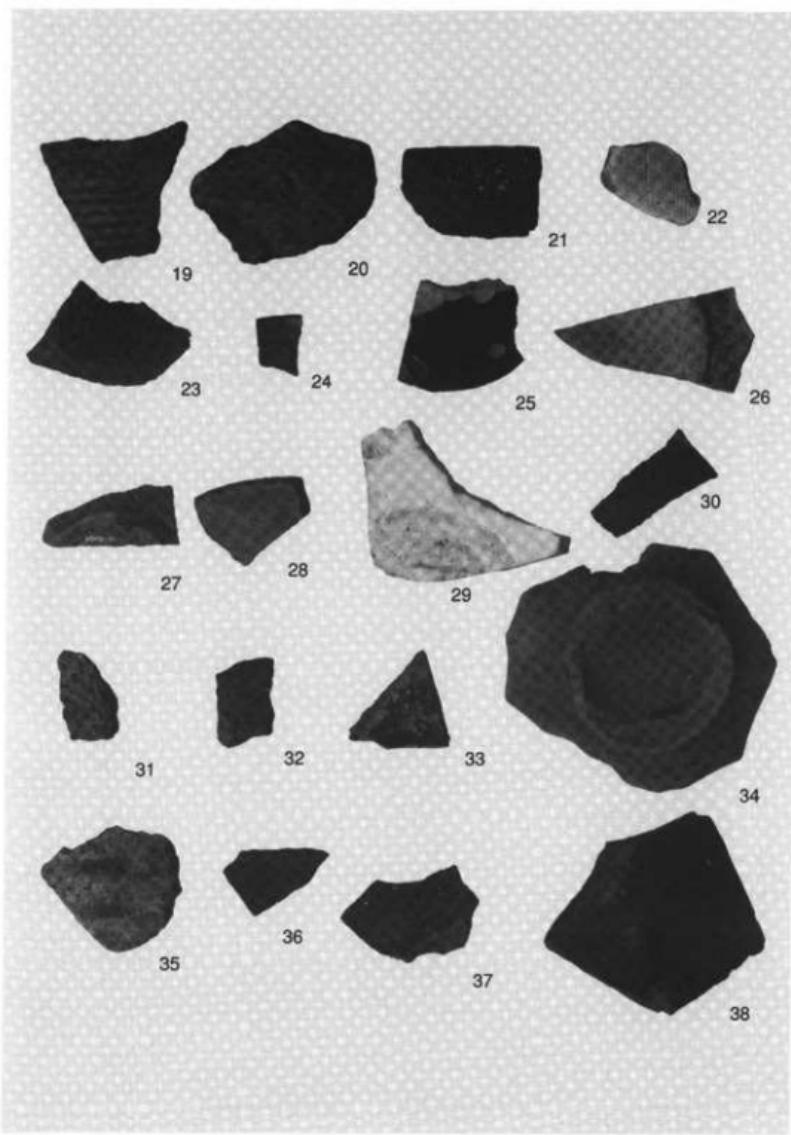
28 阿尾遺跡, 29.30 阿尾城跡, 31~33 阿尾瀬戸ヶ谷内遺跡, 34 阿尾向田遺跡, 35~42 指崎向山遺跡



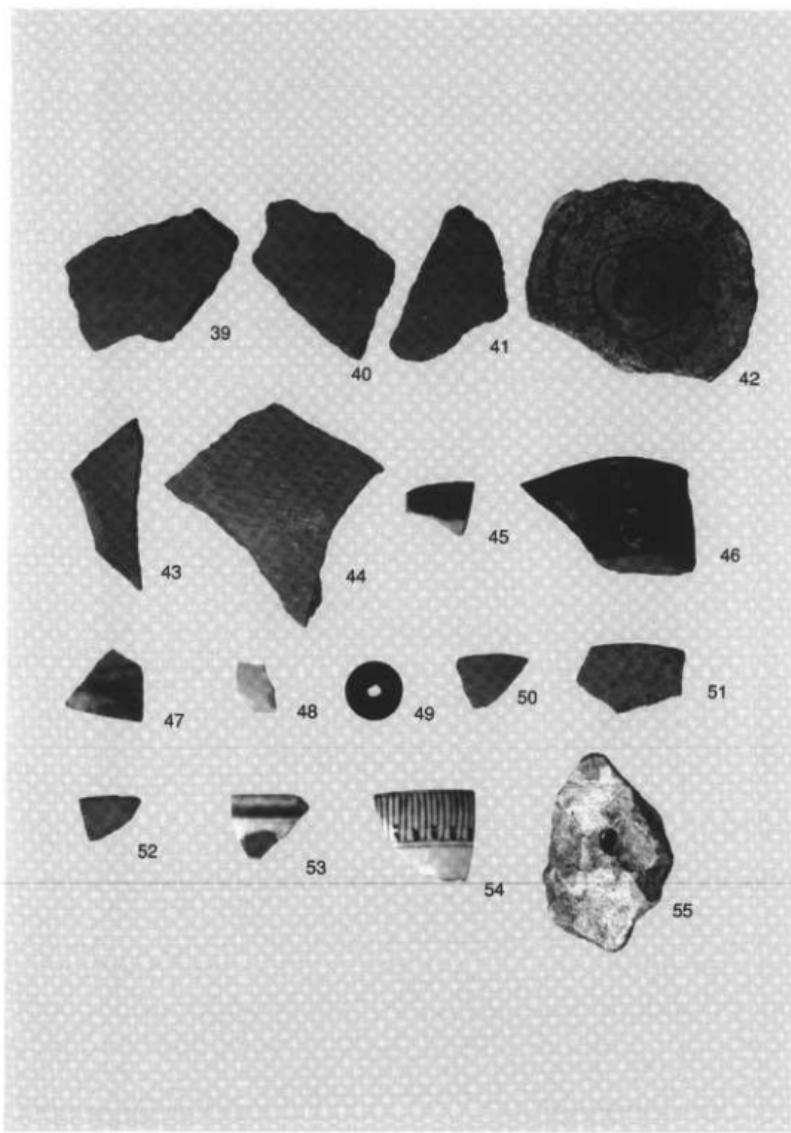
43~55 遺跡範囲外採集品



(図版3 参照)

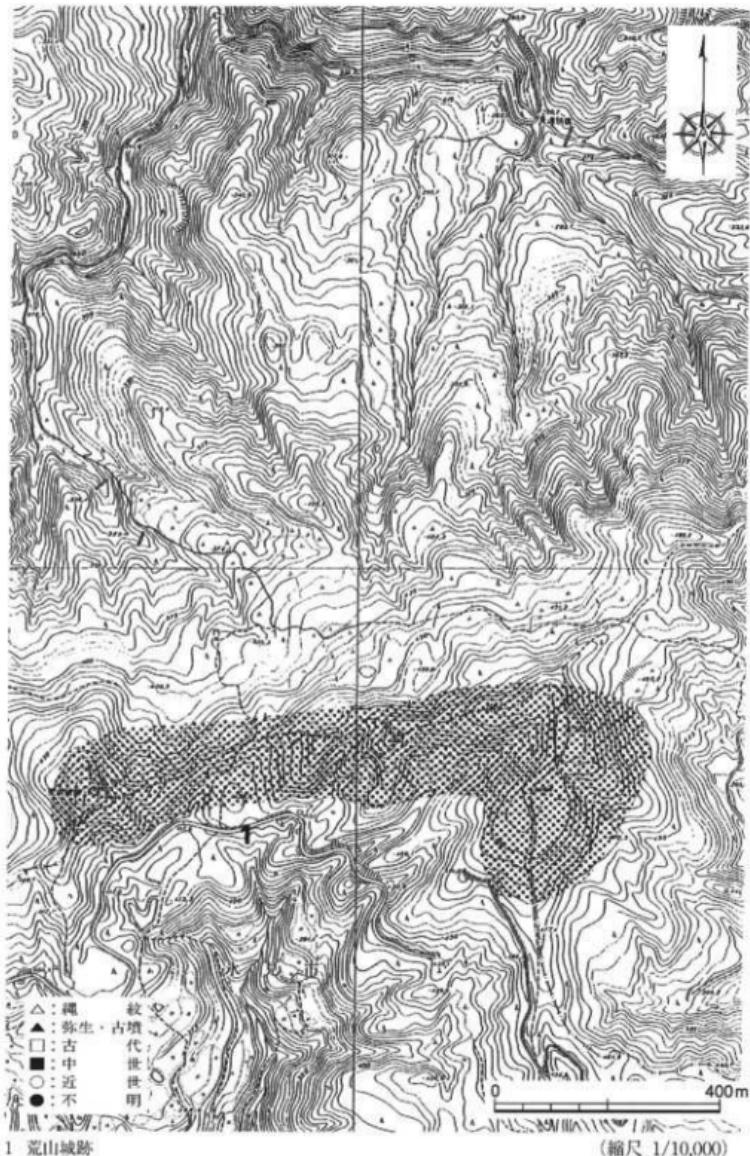


(図版3・4 参照)



(図版4・5 参照)

図版九 F地区の遺跡と遺物採集地点（一）



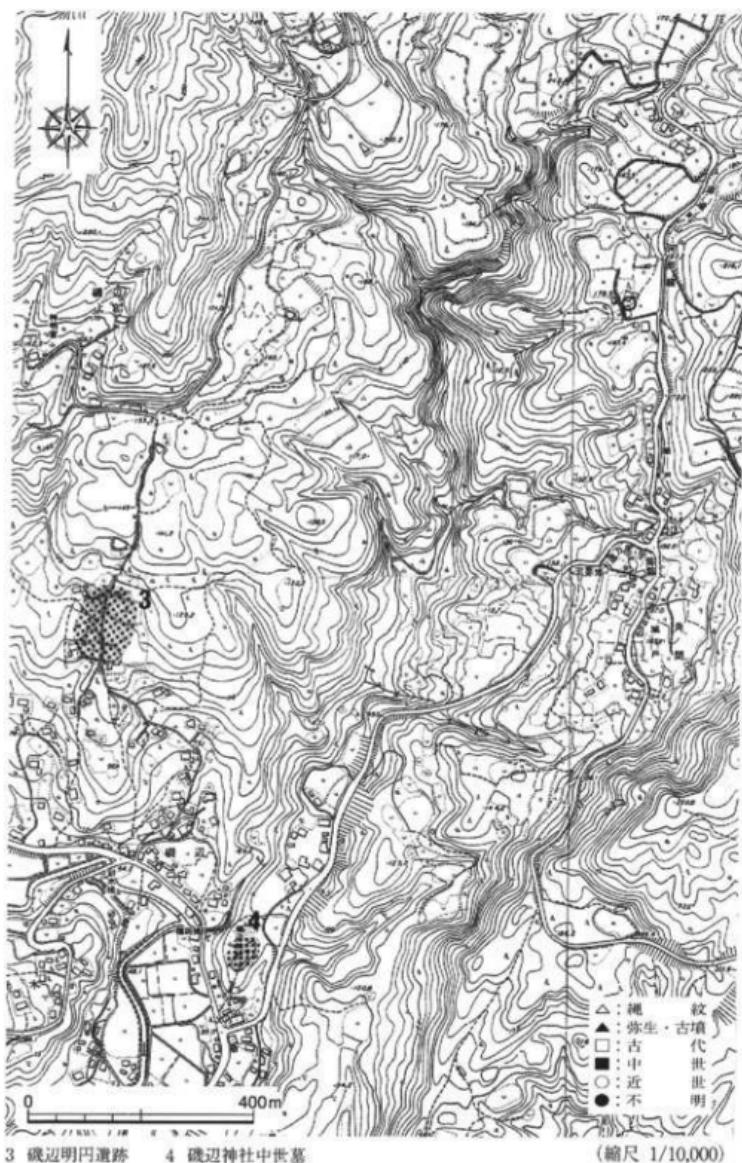
図版一〇 F地区の遺跡と遺物採取地点(二)



2 尾端城跡

(縮尺 1/10,000)

図版一 F地区の遺跡と遺物採集地点 (三)



図版一二 F地区の遺跡と遺物採集地点(四)



5 磯辺中世墓

(縮尺 1/10,000)

図版一三 F地区の遺跡と遺物採集地点（五）



6 森寺城跡

(縮尺 1/10,000)

図版一四 F地区の遺跡と遺物採集地点（六）



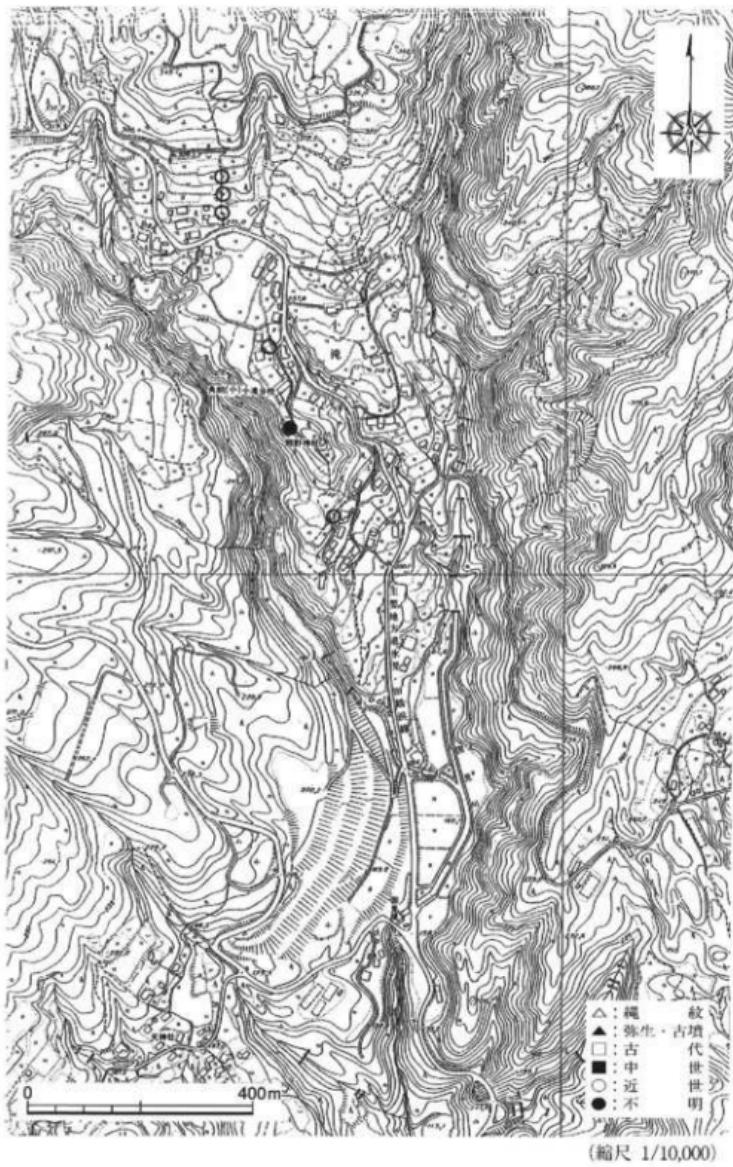
図版一五 F地区の遺跡と遺物採集地点(七)



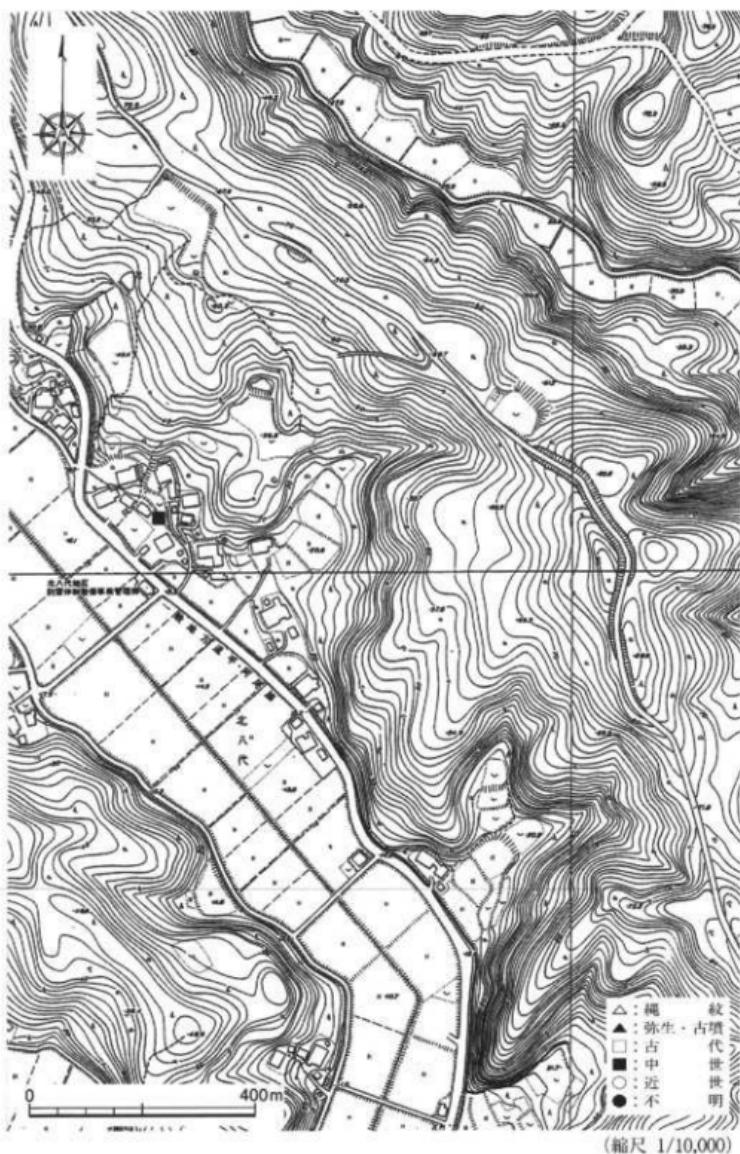
図版一六 F地区の遺跡と遺物採集地点(八)



図版一七 F地区の遺跡と遺物採集地点(九)

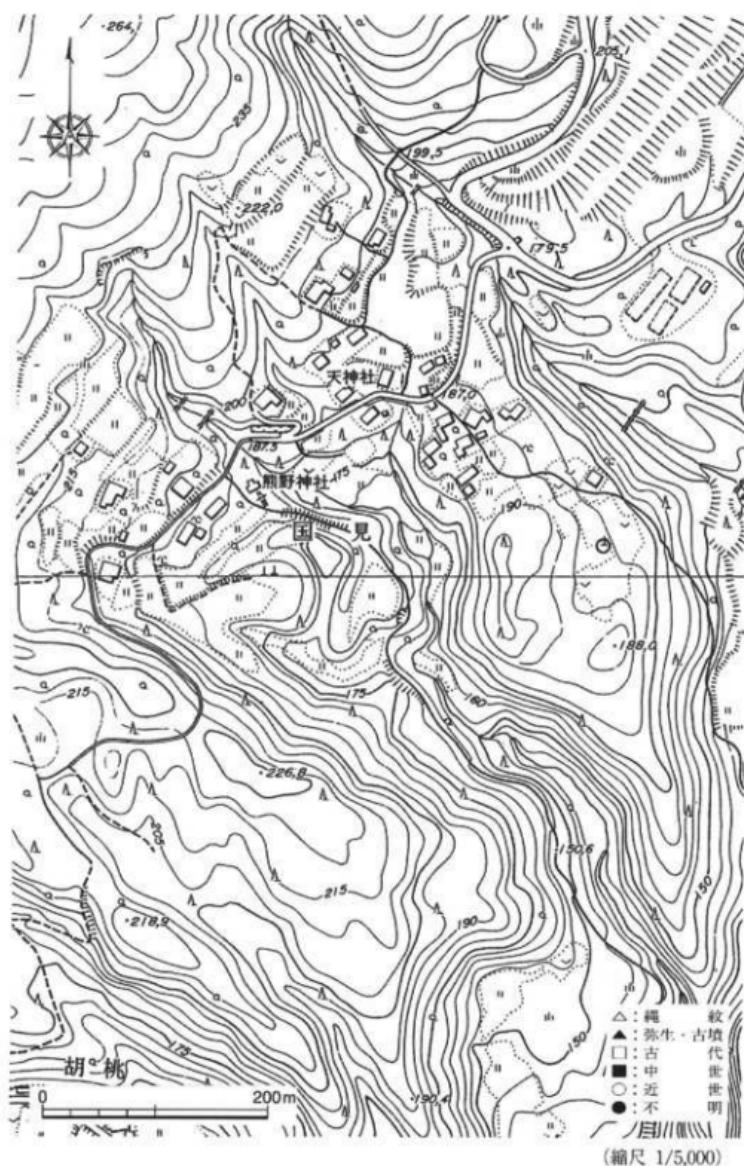


図版一八 F地区の遺跡と遺物採集地点(一〇)



(縮尺 1/10,000)

図版一九 F地区の遺跡と遺物採集地点(一一)



(縮尺 1/5,000)

1999年3月25日 印刷

1999年3月31日 発行

水見市埋蔵文化財分布調査報告VI

水見市埋蔵文化財調査報告書第27冊

発行

水見市教育委員会

富山大学考古学研究室

印刷

有限会社ひふみ印刷社